

図書館蔵書に対する評価は、その量よりも質にあることは言うまでもないが、その質的条件の中にどのような稀観本（きこうばん）

本館

稀

観

本

所蔵

世間に流布されていない珍しい書物が収蔵されているかがある。については、ご専門のお立場から本館所蔵の稀観本をご紹介します

の中から

西洋服飾稀観書(13)

“A Tour Through Paris” について

文化女子大学教授 石山 彰

首題の、つまり「パリ旅行」と題する19世紀初期のロンドンで刊行された珍しい版画集がある。人間業とも思えないほどの精巧な手彩色を施したアクアティント版で、総数21枚からなる説明文つきのフォリオ判の見事な風俗画集になっている。正しいタイトルは次のとおりである。

〔383. 135T〕 Pub. by Sams, William; A Tour Through Paris, Illustrated with twenty-one coloured plates accompanied with descriptive letter-press, London, 1822. 37. 5cm×27cm。

この版画集の価値は、その見事さにあるばかりでなく、主として次の2点で、とりわけ私たちの関心を引く。

第1点は表現形式についてであるが、私がこれまでこの欄で取りあげてきた服装書とは全く趣を異にしているということがあげられる。すなわち、これまでの服装書の中の図版や版画のほとんどが、ちょうど着せ換え人形のように一人で立っているか、数人ないしそれ以上の群像として描かれている場合でも、はなはだ図式的構図を保っている場合が多く、むしろそれが服装本やファッションブックの伝統的な図版の形式として今日まで受け継がれてきた。いわばファッション画に見る例の独特な何となくぎこちないつくろったポーズの人物像である場合がほとんどで、それは

それとして服装画としての一つの様式を保っていた。とりわけ、この特徴は画面でのすべての“背景を拒否する”という手法によつて無の空間の中に着衣人物のみを自立させ、ことさらそれを強調する、ということにあった。（こうした服飾図版のほとんどが、いわば素描の様式を継承したためとみることもできよう。）

ところが、私たちの服装というものは、それ単独の形や外見から眺めただけでは、本当のものは見えない。なぜなら、服装は広い意味で人間の生活文化の一部なのであり、それだけが孤立して成り立っているのではなく、他の文化的諸要素との密なる関連として成り立っているからである。だとすれば、服装を本当に理解し認識することができるのは、そうした生活文化総体の文脈の中に“服装”というものを位置づけしたとき、初めてそれが何であるかを理解することが可能になる。本書は、そうしたこれまでの服装書一般の欠落を補う極めて重要な機能を果たしている。

第2点は——第1点とも関連することではあるが——旅行者が見た他国の風俗としての興味である。

20世紀後半の“民族大移動”などともいわれるように、近年の日本人の海外旅行ブームは異常なほどすさまじい。それはそれとして大変結構なことであり、視野を広げること

No. 3

“ポン・デザール”の盲人



によって“脱島国根性”が促進されるなら今後の日本文化に与える影響、というよりも日本人の心に与える影響にも少なからぬものがある。しかし、本書のように、今から150年も前のこととなると話は全く別である。

本書はイギリス人の見た“パリ風俗”としてとらえられている。したがって、景観中心の観光絵葉書的な描写とは異なっていて、外国人から見た時のパリの“人人の生活”に視点を据えて生活空間の美を描いているところに独自性がある。今ならカメラによって一瞬のうちにとらえられる街の風物も、当時はこうした念入りの版画に頼る以外方法がなく、着色ともなると人間の手に頼るだけだった。皮肉にも、その前近代性が、今では稀少価値に転じているのである。

では、どんな情景が描かれているのか。原本にはNoは付されていないが、登場順に記せば次のとおりである。

- ①“サン・ルイ”の朝のワイン配給②ヴェルサイユへの馬車③“ボン・デザール”の盲人④シャンゼリゼの竹馬ダンサー⑤育児看護婦事務局⑥アンリ4世の銅像の周りでどんちゃん騒ぎをするポーターと魚売り女⑦水泳学校の室内⑧チュイルリー公園で新聞を読むパリ市民⑨地下の墳墓⑩フランスの下院⑪パリの街路の特徴⑫大通りの行商たち⑬ヴァンドーム宮での陸軍軍人の罷免⑭シャトー・ドの奇術師⑮死体公示所⑯花市場⑰パレロワイヤルの正午⑱木炭運び⑲サンジェルマン・ロクセロワ街のキリスト聖体大祝日の行進⑳国民軍の近衛騎兵の兵士たち㉑チュイルリー宮の噴水の歩道を散歩するベリー公殿下

発行所以外、この版画集の作者については不明であるが、確かな文献目録によれば、このうちの⑮～⑲の4枚は同じサムス発行のリチャード・ピークによる「フランス独自の風俗」(Peake, Richard B.; The Characteristic Costume

of France, 1819～21)からの再録であることが解っていて、なるほど、この4枚だけは作風が異なっている。

さて、これらのうち、私は③と⑧を挿図に掲げて解説しておきたいと思う。なぜなら、③(写真左)は、エッフェル塔やシャイヨ宮からの眺めに匹敵するパリ名所の一つに数えられると同時に、1820年代の婦人服の典型がそこに示されているからである。

“ボン・デザール”(芸術の橋の意)は今でもルーブル美術館と対岸の学士院とを結ぶ橋の名として残っているが、それはこの図に描かれた時のものではない。見るとおり、当時のものは1804年、技師ディヨンによって造られた鉄橋で、極めてモダンで眺めにも良く、パリ名所の一つであった。というのも、ここはシテ島によるセヌ川の分岐点に当たっており、東側にはノートルダム寺院を始め少なくとも12の教会の尖塔が眺められた一方、花火大会などの際は3000人もの重さを支える柔軟さを発揮したので一層著名になった。図では、バラソルの下に盲人と手廻しオルガンが見え、レディキュール(ハンドバッグ)をもった女兒がコインを恵む場面と、その後には母親、外人部隊の兵士と盲人のひも女が描かれている。背後にはルーブル宮が見える。

⑧(写真右)は、地図上ではシャンゼリゼへと続くコンコルド広場とルーブル宮との間に位置するチュイルリー公園の西端に、このころプティ・プロヴァンスと呼ばれた一角があり、そこに設けられていた新聞の売店をはさんで、さまざまな職業の当時の典型的パリ市民の朝の姿が描出されている。中央シルクハットの若者は、自分の公職任命の記事をモニター誌で捜しており、他方左端の男たちは株の相場を気にする政商たちである。他に数人の退役軍人の姿などもみえる。右手にダイアナの銅像の一部がのぞいている。

No. 8
チュイルリー公園で新聞を読むパリ市民

